

小さきものへの気づきの心

上 廣 榮 治

春の大会で、私は「無関心」の悪という話をさせていただきました。およそ美しいもの、尊いものを滅ぼすのは、私たちの無関心であるという話です。

この話を紡いでいく過程で、私はおもしろいことに気がつきました。それは日本人が伝統的に「小さきもの」への「関心」が高いということです。例えばこの時期、夏の歳時記を開いてみると、夏の露、病葉、たぐらば、したた、つばめ、あり、あまがえ、のみ、といった小さきものが続出します。

いったいどこの世界に、蚊や青みどろ、蚤などに文学的関心を寄せる文化があるのかと、いささか呆れる思いがいたします。現代では、磯をザワザワと這う船虫や、葉裏の雨蛙など、鳥肌が立つほど嫌いだという人も多いのではないのでしょうか。

しかし、それらを嫌うのは利害得失に囚われた大人の感覚で、外界に新鮮な感動の眼を向ける子どもたちには、また違った思いがあるのだろうと思われまます。私たちは、日がな一日、地面に這いつくばって蟻の行列に眼を輝かせていた子どもたちを知っています。石の下にうごめく灰色のダンゴ虫を愛する

小学生もおりました。彼らは、どんな自然の断片を見ても、驚きと共に感動できるのです。

そういえば、今年ベルリン映画祭で賞を受けた宮崎駿みやざきはやおさんの代表作の一つ『風の谷のナウシカ』には、「オーム」というダンゴ虫のような生物が出てきます。大人は害虫だといって排除しようとするのですが、特異な感性を持つ主人公の少女ナウシカだけは、その虫の内に人間を救う自然の摂理を見ているという設定でした。

昔から日本には、こうした大人の眼からは理解しがたいものを、とても大切にしている伝統があったように思うのです。平安時代の『堤中納言物語』つみちゆうなごんには、毛虫が好きでたまらないというお姫様の話がありますし、「やれ打つな 蠅が手をすり 足をする」という小林一茶の有名な句もあります。

大人の眼からすれば、それらはずいぶん変な物語や俳句です。ふつうの生活感覚からすれば、毛虫は気味悪く、蠅は嫌われる不潔な虫です。それを「好きだ」「おもしろい」と見るのは、まさしく子ども眼です。そして私たち日本人は、こうした物語や俳句に共感することができるのです。なぜなら、私たちは伝統的に、心の奥深くに「小さきもの」への強い関心を潜ひそめているからに違いありません。

『枕草子』の一五一段には、「愛きもの」としてさまざまな例をあげて「何も何も、小さきものは、みな愛し」と言っています。こうした「小さきもの」に対する愛好の結果、日本でトランジスタラジオや軽自動車生まれ、カメラなどの精密機械工業が発達したことを、ある韓国人の学者が「縮み志向」と指摘して、話題になったことがあります。

たしかに小さなものへの愛好は、縮み込もうとするマイナス傾向です。しかも日本人は、大掛かりで計画的なものに対しては鈍感で苦手です。計画的で科学的で、利害得失に聡い大人の発想には無関心で、無邪気な子どもの発想を喜びます。

例えば、東京の中心の皇居、つまり旧江戸城は周囲約五キロで、かつてはこのなかにたくさん建物がチマチマとあり、まるで迷路のようであったといえます。これに対して、同じ時代に完成したフランスのヴェルサイユ宮殿は、周囲約四十三キロもあり、その内部は道や運河が幾何学的に走り、無数の直線がただ一つの宮殿に集中する壮大な一大庭園になっていました。

私たち日本人は、どうも大きなことに無関心で、壮大な構想を計画し実現する能力に欠けているようです。しかし私は、そのことを困ったことだとは思いません。なぜなら、一人の人間の構想などは、それがいくら大きくても、大自然の広大さには及ぶべくもないからです。しかも、一個人や一集団の利害に基づく構想は、それがどんなに壮大で緻密ちみつなものであったとしても、所詮しよせんは万人の仕合わせに奉仕することなどできないからです。

それどころか、小さな人間が描く壮大な構想は、しばしば多大な迷惑を伴います。チンギスハーンの大帝国やヒトラーの第三帝国を例にとるまでもありません。大きなものとは、つねに小さなものの犠牲のうえに成り立っているのです。

例えば、巨大工事の進行による「小さきもの」たちの惨状はどうでしょうか。ダムの建設やコンクリートの護岸でタニシもメダカも、春の小川まで姿を消してしまいました。都市からは雑草さえも追い払われようとしています。鳥もけものも植物も、水も空気もまた同じです。ブルドーザーで芝をめくるような乱暴さで、小さく可愛いものたちは圧殺されてきたのです。みな、日本人が不得手ふえてなはずの大きな構想の実現のために起きた災厄なのです。

人が考える大構想には、必ずその構想の実現によって圧殺されるものがあります。私はその弊へいを思うにつけ、身の程を越えた大きなことは、人間の浅知恵に任せるべきではないだろうと痛感しています。

それは最も大きなもの、すなわち大自然の摂理に任せるべきだと思ふのです。大構想は人の判断によるのではなく、あくまでも大自然の摂理に問うべきだと信ずるのです。自然の摂理と倫理に照らして、善き構想はそれを実現しても、それに抵触することは断固停止されねばならないと思ふのです。

かつて日本人は、周囲四十三キロの庭園を構想するかわりに、畳半畳の空間に庭を造ろうとしてきました。しかしそれは、大きなことを考えない、ということではないのです。実は小さなもののなかに、最も大きなものを見つけていたのです。箱庭、盆栽、生け花、茶の湯など、いずれも取るにも足らぬ小さなものや空間に、大自然の摂理を感じ取ろうとする試みでした。あるいは、わずか十七文字の俳句のなかに、自然界や人間の機微きび、さらに宇宙の真理まで詠み込もうとしたのです。

それは、誰も傷つけない、何物をも抹殺しない立派な文化であると思います。それは確かに「縮み志向」かもしれませんが。しかし、縮み込んだ先に、大自然の摂理という大宇宙を見つめようとしたのです。利害を前に立てた大構想のもとに他を力で支配しようとする傾向とは、それは正反対のあり方です。

今日の社会は、あまりに「小さきもの」への深くやさしく繊細な「気づき」の感覚を鈍らせてしまっています。人々は自分の利害得失と欲望以外には徹底的に無関心になっています。

だからこそ会友一人一人が、身の回りの小さな事物にも目を向け、関心を持ち、愛を喚起すること。私はそれがとても大切なことだと考えています。小さな事物、多くの人が無関心である事物、そこにこそ最も大きなもの、すなわち自然の摂理がありありと見えてくると思ふのです。そしてそこから、より大きなものへの善き関心も深まっていくと思われまます。

もし世界中の人々が、利害得失に基づく大構想より、無邪気な子どもたちの眼の内に真理を発見できるよくなるならば、世界ははじめて、真の平和と仕合わせへの門を開くことができると思ふのです。